

## ラテンアメリカ都市物語

＝第20回＝

# ポート・オブ・スペイン —東カリブ地域を代表する都市

鈴木 美香

トリニダード・トバゴ（以下 TT）は、大きく分けるとエネルギー産業を主産業とするトリニダード島と観光業を主産業とするトバゴ島に分かれる。首都ポート・オブ・スペイン（以下 POS）は、トリニダード島の北西部に位置する。首都と言っても面積 5,130km<sup>2</sup>（千葉県程度）、人口 139.5 万人（京都市程度）の首都なので、日本では町や村程度の規模に過ぎないが、東カリブ地域では都会である。また、TT では周辺地域も含めて POS と呼ばれることが多いが、厳密に言うと POS に該当する部分はそれ程広くない。10 分もあれば車で端から端まで移動できるこぢんまりした町である。ラテンアメリカ・カリブの主要国と比較すると、見どころやインパクトにかけるかもしれないが、歴史的建造物や政府庁舎、近代的なビルが並び、政府関連行事のほか、カーニバル、クリケットをはじめとするスポーツの試合など、重要なイベントが開催されるため、TT のビジネス・観光の拠点となっている。

筆者は 2010 年 10 月から 2016 年 12 月までの 6 年 2 か月、在 TT 日本国大使館の専門調査員として POS 市内にある事務所に勤務し、POS に隣接する地区で暮らした。事務所周辺の歴史的建造物のほか、アフターファイブのジョギングや文化イベントの際に足を運んだサバンナ（後述）、買い物で利用したショッピングモール、地元の友人達と行ったレストランやナイトクラブ等、POS には思い出深い場所が多い。本稿では、POS の歴史や見どころ、近年の街の様子、POS が直面する問題について紹介する。

### ポート・オブ・スペインの歴史

筆者が TT に赴任する直前、当時勤務していた職

場の顧客に退職の挨拶メールの中で POS 行きを告げたところ、同顧客から「スペインに行かれるのですか。いいですね」と誤解を受けたことがある。TT は 1962 年 8 月に英国から独立したが、当初はスペイン領であった。POS の名称はスペイン領時代に由来する（スペイン語では、プエルト・エスパーニャ）。

トリニダード島は 1498 年にコロンブスの第 3 回目の航海で“発見”され、1592 年にスペイン人が入植した。当時の首都はサン・ホセ（現在のセント・ジョセフ）であった。スペインがトリニダード島を軽視し同島の防衛を強化しなかったため、サン・ホセおよびその周辺では外国人の海賊や略奪者による襲撃事件が相次いだ。1757 年にペドロ・デラモネダが総督としてトリニダード島に赴任した時には、総督官邸が廃墟と化していたという。デラモネダは同年に首都を現在の POS がある地域に移転させた。

スペインは 1797 年までトリニダード島を統治したが、実際は周辺のカリブの島々から来たフランス人入植者の影響が強く、フランスに加え、英国、オランダもトリニダード島の領有権を巡って争っていた。1802 年になると、アミアン条約によってトリニダード島は英領の支配下に置かれた。1889 年にはトバゴ島と併合され英領 TT となった。

### ポート・オブ・スペインおよびその周辺の見どころ ポート・オブ・スペイン

POS の中心となるのはダウンタウンで、約 100 年前からあるウッドフォード広場が拠点となる。広場の目の前には「レッド・ハウス」の名で親しまれている国会議事堂がある。1990 年 7 月にイスラム教急

進派団体がクーデター未遂事件を起こした際、ロビンソン首相（当時）をはじめとする政治家を人質に取り立て籠もった同団体と政府軍の間で激戦が交わされた場所である。激しい銃撃や火災で建物が損傷したことを受けて修復されることになったが、資金不足により30年以上経った今も修復作業は完了していない。このほか、POS市庁舎、裁判所、国立図書館、教会などがウッドフォード広場を囲んでいる。

このようにダウンタウンには歴史的建造物や政府庁舎、企業の事務所が集まっているため、昼間は活気に満ちているが、商店の多くが閉まる夜間や日曜日・祝日は閑散としている。ダウンタウンと川を隔てた場所はTTで最も治安が悪く地元の人々も近寄りたがらないラバンティル地区となる。同地区に入ると、劣悪なインフラ、倒壊寸前の家屋、銃弾の痕が残る建物など一瞬で景色が様変わりする。ダウンタウンの街歩きには細心の注意を要する。

ダウンタウンから車で5分ほど北に行った場所には、クイーンズ・パーク・サバンナ（以下 サバンナ）

がある。1周3.5kmの緑に追われた公園で周囲は一方通行のロータリーとなっている。元々は砂糖農園で、1990年代初期までは競馬場、クリケットやサッカー等のグラウンドとして使用されていた。現在は市民の憩いの場となっており、平日の夕方や週末の昼間には芝生でサッカーや凧揚げに興じる人々、散歩やジョギングをする人々が集まる。

サバンナの南側にはイベント会場があり、様々な文化イベントが開催されている。特に、毎年2月ないし3月に開催されるカーニバルの時期には、カーニバル当日のカーニバル・バンドによるパレードに加え、野外パーティー「フェテ」、TT発祥の楽器スティールパンの国際大会「パノラマ」、大人の仮装大会「ダイヤモンド・グラ」、子供の仮装大会「キッズ・カーニバル」等数々の関連イベントが開かれ、大勢の人で賑わう。普段は殆ど見かけることのない外国人観光客の姿も目立つ。日本人観光客もあり、彼らの大半は「パノラマ」に奏者として参加するためにやってきた若者でリピーターも少なくない。

このほか、サバンナの南側には中国の融資の下建設されたNAPA(国立芸術アカデミー)がそびえ立つ。シドニーのオペラハウスを髣髴とさせるような圧倒的な存在感で、遠方からでも一目で分かる。

サバンナの北側から東側には、大統領官邸、エンペラー動物園、植物園、「壮大なる7軒」と呼ばれる英領時代の建物といったように観光地が立ち並ぶ。特に、「壮大なる7軒」の一つであるストルメヤーズ・キャッスルという名の小さな城や中高一貫校クイーンズ・ローヤル・カレッジは目を引く造りとなって



カーニバルのパレード（写真は特に断りのないものは執筆者撮影）



カーニバル関連イベントの優勝者が集う「チャンプス」でのスティールパンの演奏



高台から見たサバンナとNAPA

いる。「壮大なる7軒」の裏側は、教育省や大統領府などの政府の建物、外国の在外公館や富裕層の邸宅が集まる一角で、日本大使館もここにある。

#### ポート・オブ・スペイン近郊

TTが小国であることの利点の1つに、POSから車で1時間以内に主要施設・観光地にアクセスできるという点が挙げられる。トリニダード島の空の玄関口であるピアルコ国際空港までは、道路が混雑していなければ20分程度で移動することができる。第2の都市サン・フェルナンド（南部）までは1時間、人口密集地帯のアリマ（北東部）やチャグアナス（中西部）までは30分程度で移動が可能である。

POSと空港の中間地点から少し南に行くと、カロニ湿地帯の野鳥保護区が広がっている。ボートでマングローブに覆われた湿地帯を抜けると、最後にTTの国鳥であるスカーレット・アイビスなどの野鳥が集まる湖に辿り着く。夕暮れ時に赤や白のスカーレット・アイビスが四方八方から集まり、湖の中の小島を赤や白で埋め尽くす様子は圧巻である。

また、POSから山道を抜けたトリニダード島の北海岸には、同島で最も人気の高いマラカス・ビーチがある。海の透明度はトバゴ島や他のカリブの観光地には劣るが、実際のところ地元の人々は、海水浴よりも家族や友人との浜辺でのピクニック、マラカス・ビーチ名物のバイク & シャーク（鮫バーガー）目当てに訪れている。

POSから車で30分程度東に進んだトリニダード島北西部の先端にあるチャガラマスは近年開発が進んでいる地域で、ヨットハーバーのほか、ハイキングやゴルフ、ジップラインなどが楽しめるレジャー施

設・公園が点在している。チャガラマス沖の離島では、釣りやハイキングといったアクティビティが人気である。

米国から飛行機でトリニダード島に移動すると、飛行機はトリニダード島北西部から入り高度を下げながら東に進んでいくことが多い。チャガラマス、サバンナおよびPOSの沿岸部のビル群、東西を結ぶ高速道路、南北を走る高速道路、カロニ湿地帯を通り過ぎた後、滑走路が現れ着陸するという流れだ。この一連の景色を目にすると、TTに帰ってきたという思いに駆られる。

#### ポート・オブ・スペインの今と課題

##### 近年の変化

私は離任後、これまでに2017年の夏と2018年の年末の計2回TTを訪問した。トリニダード島の中西部や南部は開発が進み、新しい大型ショッピングモールや道路が出来ていたが、POSには殆ど変化が見られなかった。

そのような中で、2019年10月に中華門がダウンタウンのシャーロット・ストリートに建てられ、その一角が「中華街」という名称になったというネットニュースを目にした時には驚きを隠せなかった。シャーロット・ストリートには、英領時代に中国本土から来た契約労働者の子孫が設立した中国系の親睦団体の事務所、レストランやスーパーマーケットが集まっている。近年はTT全体で中国系移民の流入が目立っており、シャーロット・ストリートを歩いていると中国語が聞こえてくることもある。

しかし地元では、門の建設、地名の変更に対する反対の声も根強かったようだ。欧州列強による支配



ストルメヤーズ・キャッスル



クイーンズ・ローヤル・カレッジ

の歴史、英語圏以外の海外との接点が少ない島国という地理的・文化的事情により、TT 人の間では外国による支配や干渉、価値観の押し付けに対する抵抗が非常に強い。

中国系移民が TT の経済活動を支えてきたこと、近年中国がインフラ開発などを通じて TT の発展に貢献していることは認識しているものの、複雑な思いは消えないようである。

### 直面する問題

POS が直面する問題の一つには交通渋滞がある。POS の人口は 3.7 万人（2011 年国勢調査）に過ぎないが、平日には 25 万人もの人々（TT の人口の約 5 分の 1）が通勤・通学のため、全国各地から POS およびその周辺にやって来るといふ。TT には電車や地下鉄がなく、バイクや自転車はあまり普及していない。公共交通機関はあるものの、治安上の理由から利用したがる人也不多い。自分で運転、或いは家族や親戚による送迎で移動することが当たり前のため、必然的に道路には自家用車の数が増える。にもかかわらず、高速道路や一般道の数に限られてお

り、ダウンタウンやその周辺は一方通行の狭い道が多い。こうした事情から、混んでいなければ 30 分～1 時間の通勤・通学時間が倍以上となってしまうのである。

日本大使館から車で 30 分～1 時間の地域に住む、筆者の TT 人の元同僚の多くも POS の交通渋滞に悩まされていた。始業開始時刻は 8 時であったが、彼らの中には、7 時台に家を出ても間に合わない恐れがある、そもそも渋滞で時間や体力を使いたくないと、6 時台に家を出て、事務所の鍵を持っている日本人職員が来るまで大使館敷地内の駐車場で待機している人もいた。

渋滞緩和策として、山岳地帯が多いトリニダード島北部にトンネルを作る、現在は一般道一本しかないチャガラマス～POS 間についてパリア湾を埋め立てて新たな道路を作る、トリニダード島南部と POS 間についてもパリア湾上に南北縦断道路を作るといった計画がこれまで浮上したようだが、いずれも環境面への影響を懸念する住民からの反対、資金不足等により頓挫している。公的機関の事務所を POS 以外の地域に移転させる動きもあるが、一部に留まっている。

筆者は、2020 年にも TT を訪問する予定としていたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の蔓延危機によりその予定はキャンセルとなった。ネットニュースを閲覧したり地元の友人に話を聞いたりする限りでは、新型コロナ危機対応を除くと POS や TT に大きな変化はなさそうだ。それでも 6 年以上も暮らし、今でも繋がっている自分にとって第 3 の故郷のような場所なので、あの場所で見えた景色、聞いた音楽、感じた空気や匂い、接した人々を恋しく思うことも多い。新型コロナ危機収束後に真っ先に訪れる場所になることは言うまでもない。

（すぎき みか 亜細亜大学国際関係学部非常勤講師）



シャーロット・ストリートの一角にできた中華門  
（撮影 Clayton Sawh）